

# 杏林

KYORIN DAIGAKU SHIMBUN

## 大学新聞

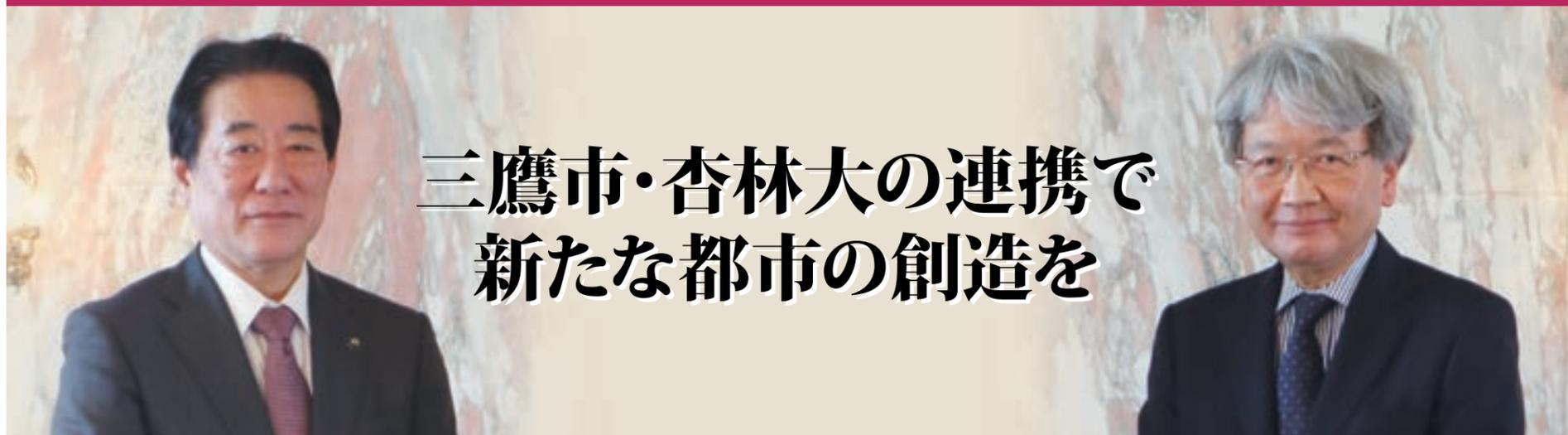
- 1-2面 杏林大 地域貢献の未来  
三鷹市 河村市長・渡邊学長 特別対談
- 3-5面 杏林大の地域連携・地域貢献
- 5面 AFTER/WITH コロナの学生支援  
学生相談と就職支援
- 6面 頑張る学生 クローズアップ
- 7面 建学の精神が息づく本学キャンパス
- 8面 リレーエッセイ(3) 健康ひとくちメモ(30)  
Before going to study abroad...



# 豊かな住みよい地域社会をつくる! 杏林大 地域貢献の未来

2006年の教育基本法改正以来、日本の大学は教育・研究に加えて地域貢献が重要な使命と位置付けられ、本学も「文部科学省：地（知）の拠点整備事業」の認定を受けて多彩な地域貢献活動を行ってきました。その活動は社会課題を実体験する学生の教育効果を高めると同時に、この地域の健康や文化の発展に大きく寄与したと言えます。国や地域社会が抱える課題が複雑化し、その解決には多様な組織の連携や協働が欠かせない今の時代、本学はその特徴や強みを生かして、どのように地域と連携し、どのように地域に貢献すべきなのか、今号の特集では本学の地域連携・地域貢献の歩みを振り返り、未来のあるべき姿を探ります。

### 【特別対談】



## 三鷹市・杏林大の連携で 新たな都市の創造を

1954年静岡市生まれ。早稲田大学商学部を卒業後、1977年三鷹市役所に入庁。企画部長、副市長等を経て、2019年4月の三鷹市長選挙で初当選

三鷹市  
かわむら たかし  
河村 孝 市長

杏林大学  
わたなべ たかし  
渡邊 卓 学長

1953年京都市生まれ。東京大学医学部医学科卒業後、1991年杏林大学着任。医学部付属病院臨床検査部長、医学部長を経て、2022年4月に学長就任

杏林大学が三鷹市新川に創立されて57年。この間、杏林大学は付属病院を通じて地域住民の健康と診療を担い、井の頭キャンパス開設後は総合大学として広く市民生活を支えてきました。このうち地元三鷹市とは年間に40近い連携事業が実施され、公開講座やイベント、ボランティア活動などを通じて教員や学生が市民と交流する場が日常的なものになっています。この両者の絆をこれからどのように継続・発展させて行くべきなのか、三鷹市の河村市長と本学の渡邊学長に話し合ってもらいました。

## 57年間の連携 さらにワンランクアップ

### 医療から始まり 総合的な協力関係に発展

河村市長：私からはまずお礼と感謝をお伝えしたいと思います。杏林大学との関係は2段階に分かれていて、最初は三鷹に医学部、付属病院、看護専門学校と医療関係の分野が中心だった時代です。何かあったら杏林さんに助けってもらえるという、安心感や信頼感が市民や医師会の中に間違いなくありました。第2段階は、井の頭キャンパスが開設され、八王子から他の学部の皆さんに来てもらったことで関係が非常に多角的になり、市民

サービスの隅々にまでご協力いただけるようになりました。例えば、三鷹国際交流協会は松田理事長にトップを務めてもらっていますが、協会が毎年主催している井の頭公園での「国際交流フェスティバル」は三鷹で一番大きなお祭りとなり、学生さんも先生方も含めてご協力いただいています。また、コロナ禍では、大学のアリーナを市民のワクチン接種会場として提供してもらったり、杏林大学病院が中核になって患者さんを受け入れてもらったりしたことは本当に心強かったです。

渡邊学長：杏林大学は、先ず医療機関として

三鷹市での活動をスタート。その後のキャンパス移転により大学全体が三鷹に集結することとなり、文系理系合わせた総合大学としての三鷹での活動が可能となりました。文部科学省の地域連携関連プロジェクトでは、三鷹市長に随分ご協力いただいたと伺っています。お陰さまで杏林大学も地域連携の体制を考え直す良い機会になりました。杏林大学では、様々な形で三鷹市のお手伝いをさせていただいていますが、各現場でその都度、必要に応じて行っている側面があります。今後は、三鷹市と杏林大学の連携のレベルをワンランク上げ、地域と大学との新しい関係の、一つのモデルを目指したいと思っています。それにより、三鷹市のお役に立つことができ、市民の皆さんにもそのメリットをより広く感じていただくことになれば嬉しいです、

私どもも学生教育をはじめとして、様々な学ばせていただく機会がさらに増えるものと考えています。特に学生にとっては、教科書で学ぶだけではなく実際に現場を見て、社会の課題を実感することの重要性を、私どもも認識しております。

河村市長：大変ありがたいご提案です。2005年に産官学の協働により新しい地域の学びと研究の場として開設した三鷹ネットワーク大学では、杏林大学の多数の先生方から草の根でご協力いただき大きな強みになっています。こうした先生方とのつながりは、今は現場で個別に行われていますが、学長の先ほどのご提案が実現すれば、杏林大学、三鷹市、そして三鷹市民にとって、相互の連携が良い方に循環して行くと思います。



## 三鷹市を自治体・大学連携のモデル都市に

### 市民にとってよい街 よい大学であるために

河村市長：杏林大学は総合的な大学です。地域には医療の問題はもちろん、それ以外の問題もたくさんあります。様々な分野で三鷹市を舞台にして研究・教育活動を行っているだけだと思いますし、ヨーロッパなどに見られる大学街のように、大学を核にした都市づくりを三鷹市が進めることもあり得ると思います。ヨーロッパの場合は街のスケールがもっと小さいかもしれませんが。

渡邊学長：むしろ、三鷹市の規模はちょうど良いのではないのでしょうか。例えば、外国語学部でしたら、地元にあるいろいろな標識や案内文を、英語や中国語を併記して整備するのも一つのアイデアかと思います。ネイティブの人から見ると、外国語の標識なども間違っていたり、意味が解らなったりするのも珍しくないようです。これからは大学と自治体が新たな関係づくりを進め、より市民

の豊かな生活を支える一助になればと思います。それは一つの大きなまちづくりのテーマになりますし、私どもの研究のテーマにもなります。検証を繰り返しつつ進めて行ければと思います。自治体とそのような深い関係を築いている私立の大学は、日本ではまだないのではと思います。

河村市長：それができれば大学と自治体の共同研究という形で国の支援を受けられる可能性もあります。三鷹市が全国のモデル都市として評価されれば素晴らしいと思います。

渡邊学長：本日は、河村市長が、杏林大学との様々な形での連携について前向きなお考えをお持ちであることをお伺いできて、大変嬉しく思います。ぜひ、ここだけの話ではなく、具体的な動きに繋げていければと思っていますので、実現に向けてよろしくご協力をお願いします。お忙しい中、ありがとうございました。

## 時代は科学的な“エビデンス”を求めている

### 大学が地域に出て 社会課題に向き合う意味

渡邊学長：最近、何事もエビデンスに基づいて解決することの重要性が叫ばれています。既存の考えも改めてきちんと調査し、科学的に評価をして、その重要性を的確に判断する必要があります。物事を判断する際に、エビデンスを積み重ねていくことは非常に大事で、そういう観点から、大学が地域での活動の様々な局面に関わり、自治体が計画や政策を考える際に、客観的な評価に基づくアドバイスを行うことは意味があると考えます。そしてまた、それが大学の教員にとっては、新たな研究の課題になりうると思うのです。

河村市長：学長がおっしゃるように、エビデンスが非常に大事です。今の社会は様々な分裂しています。若者と高齢者、子どもと親

御さんなど、立場によって意見が分かれてしまいます。それは当然のことですが、そうしたなかで物事を決める時に必要なのがエビデンスです。

例えば、感染症が蔓延している時に学校を休校にするかどうかを判断する場合、市民の間には授業は休みにしても給食だけは続けてほしいという声もあり、一方でそれだと感染防止の意味がないという声もあります。そうした時に、何をどうすればどの程度感染を防げるのか、蔓延させないためにはどうすればいいのかなどエビデンスを示しながら政策を考えなければいけない時代になってきています。課題は山のようにありますが、様々な場面で問題が細分化され、その都度代替案を用意するような対応が必要です。こうした時に、本当はどうなのか、この方法を取ったらどうなるのか、ということについて、大学の先生方の見識や知識が非常に大事で、さらに学生さんのパワーも頼りにしています。



①井の頭公園で行われる三鷹国際交流フェスティバルでは本学の学生や教員も運営をサポートしている ②松田進勇記念アリーナでは三鷹市民対象のコロナワクチン接種が行われた ③三鷹ネットワーク大学で開催している杏林大学公開講演会 ④三鷹市在住の高齢者を対象に開催している健幸ストレッチ教室では理学療法専攻の学生がサポートにあたる

## 多様・多彩な杏林大の地域連携・地域貢献

2013年～2017年にかけて、本学は「杏林大学COC事業」として、三鷹市、八王子市、羽村市が抱える都市型高齢社会という地域課題に対し、知の拠点となって地域社会と連携し、問題解決を図る様々な取り組みを行いました。これをベースに本学は「人のために尽くす」という教育理念のもと、「生きがい創出」「健康寿命延伸」「災害に備えるまちづくり」の3つの観点において地域貢献の拡充に努めています。4学部によって行われるその活動は地域社会の隅々に及ぶ広範囲で多様なものとなっています。その一端を紹介します。

### 実体験を通して医療・福祉を学ぶ 「地域・医療体験学習」

重度障がい者のもとを訪れ、食事の介助をしたり、文字盤を使ってコミュニケーションを図ったり、ロボット(Hug)を使ってベッドから車椅子などに移乗させたり。これらは医学部3年生が「地域・医療体験学習」で実体験した内容です。

「地域・医療体験学習」は、1～3年生の早期体験学習の一環で行われています。1年生は国立ハンセン病資料館などを訪れ、ハンセン病をテーマに学びます。2年生は福祉・高齢者施設、在宅医療クリニック、地域包括支援センターなどで1日体験学習を行います。3年生は「NPO法人 境を越えて」の協力を得て、地域で暮らす重度の障がい者のもとで

体験学習を行います。学生はこうした体験を通して、人々がどのように暮らし、またどのように暮らしたいかについて理解を深めます。

#### 体験を通じた学びと交流

学生たちは、「街には危険な場所がいくつもある。もっとバリアフリーが進んでほしい」「外出の準備も大変で、『通院は旅行みたい』と言う家族の言葉が心に残りました」「人手不足のため24時間ヘルパーを依頼するのは簡単ではないとわかりました」「医者になる前に体験できてよかったです」と感想を寄せました。

学生を受け入れた方々からは、「Hugの操



作を短時間で覚えたことに驚きました。力の加減を気にする優しさも嬉しかったです」「車いすを押すのは初めてのようでしたが、段差は慎重に、上り坂では懸命に押ししてくれました」「素敵なお医者さんになってほしいです」「活動を通して在宅の知識を持つ医療者が増えることを願います」などの言葉をいただきました。

科目を担当する江頭説子准教授は、「『良き医師』になるためには、医学・医療に関する

知識・技能だけでなく、福祉の果たす役割を理解し、医療は病院だけで完結するのではなく、患者や家族、支援する人々や関係する施設も含めて成り立っていることへの理解が求められます。学生たちにとっては当事者や介助者の方々とじっくり話をしたことで、障がい者を取りまく現状などについて深く考える機会になったようです。関係者の皆さまが準備をして快く受け入れてくださったことに感謝致します」と話しています。

### ボッチャで高齢者の健康増進に寄与



#### ボッチャ普及の陰に本学の活動

ボッチャは性別や障がいの有無に関わらず、高齢者から子どもまで楽しめるスポーツです。特に高齢者には、地域の人との交流や健康増進に役立つことが期待できます。2015年に三鷹キャンパスの体育館で、地域の人たちを対象に講習会を実施したのが、本学のボッチャを通じた地域貢献の始まりです。今では三鷹市や企業などと連携して大会や講習会を開き、市民の健康増進に一役かっています。

#### 競争意識で意欲も増す

本学の学生14人が大会の運営面で協力した、第5回シニアボッチャ大会が10月21日、三鷹市のSUBARU総合スポーツセンターで開かれました。合計24チームが参加してハイレベルで白熱した試合が繰り広げられました。参加者からは、「ボッチャはやればやるほど面白い。もっと上達したい」、「負けて悔しい、来年は勝つ！」などの感想が聞かれました。仲間意識や協調性ととも、「次は頑張る」という意欲も芽生えるなど、ボッチャの魅力が存分に発揮された大会になりました。

#### 活動を通して学生の社会性育む

学生たちは、この大会で市やボランティアの人たちと共に、参加者にけがや事故が起きないよう、会場内の安全や健康状態に配慮して運営にあたりました。

理学療法学専攻2年生の大泉泰生さんは、「無事に大会を終えることができホッとしています」と感想を話しました。そして、「大会や講習会で、学生生活では出会えない、幅広い年代の人と交流できるのもこの活動の魅力です。参加者と共に楽しく、健康にもよいボッチャで地域を盛り上げたい」と話しました。

ボッチャ部の学生を指導する保健学部の一場友実准教授は、「高齢者がボッチャを通して得られる身体機能の向上、うつ予防、ストレス軽減などの効果を科学的に検証し、ボッチャの魅力として普及活動に活かしたいと思います。学生には、ボッチャを通して実際に障がいを持っている方や幅広い世代の方々と交流し、人との接し方や世代に合わせた対応の仕方など多くの経験を積むことで社会性を身に付けることができると思います。この貴重な経験を大切に、卒業後に立派な理学療法士として活躍してくれることを期待しています」と話しています。

### 独自の散策コースで人を呼び込み 街を活性化 ゼミ生とJRのユニークな企画



#### 1,000人が参加した「駅からハイキング」

今年10月下旬と11月初旬の週末、JR三鷹駅で「学生が考えた駅からハイキング」と題した散策プログラムのコースマップがハイキング参加者に配られました。

外国語学部の志村ゼミの学生たちがJR三鷹駅と協働して実現したこのプログラム。参加者は5日間でおよそ1,000人にのぼりました。三鷹駅をスタートして公園や神社などを巡る12.5kmのコースは、学生たちが何度も実地踏査を経て作成しました。コースルート付近にはパン屋やそば店、カフェなどの商業店舗が図示され、そこに立ち寄ると特典が得られるようになっています。開催日には学生たちが参加者の受付やコースマップの配布、駅構内のアナウンスなども担当しました。

#### 地元商店も期待大

このユニークな企画を始めたのは2015年。当時、外国語学部があった八王子で、ゼミ生たちがJR東日本八王子支社や観光協会などと協働して実施し、その後井の頭キャンパスに移ってからはJR三鷹駅を起点にしたコースを設定して開催してきました。こうしたコースはこれまで7種類作られ、桜や紅葉が楽しめるもの、江戸の二大上水を巡るものな



ど三鷹市の自然や歴史、文化に触れることのできる多彩な内容となっています。合わせて参加者が地域の商店などを利用することで地域経済の活性化にも繋がると、地元商店からも期待されています。その店主の一人は「初めて来てくれた人も多く、こんなお店あったんだねと言われ、認知度が高くなった気がして嬉しいです」と話します。

#### 学生の实地教育で多大な成果

指導した志村良浩教授は、「この企画はチームでの協働に加え、外部機関と調整や交渉といった、学生が普段接することのできない方とのコミュニケーションが求められる貴重な学びの機会です。また、教育活動を通して日頃お世話になっている地域に貢献できる魅力的な企画でもあります」と話しています。

ゼミ生の一人で3年生の榎並千紗さんは、「暑い季節の実地踏査だけでなく、コース上の施設や店舗の方とのやり取りや情報の整理にとても苦労しましたが、話し合いを重ねて解決策を導き出すことができました。今後も地域の魅力を発信し続けたいです」と話しています。

## いきいきした地域づくりに貢献 地域活性化コーディネーター養成プログラム



秋晴れとなった10月28日、民家の庭先にコーラスの歌声が流れ、地元で獲れた野菜や手作りの小物が販売されるイベントが開かれました。ここは、下連雀にある古民家を改装した地域のコミュニティ「おむすびハウス」。運営団体の主催者 藤原雅子さんは、本学の社会人向け講座の2016年度修了生です。

本学は、地域の人たちの生きがいづくりや地域活性化に貢献する人材の養成を目指し、社会人を対象としたプログラム「高齢社会における地域活性化コーディネーター養

成プログラム(旧いきがづくりコーディネーター養成講座)」を2014年から開講しています。

### 講座履修で生まれたアイデア

講座を修了した後に藤原さんは、「自宅敷地内の空き家を地域の交流場所にできたらと、講座の同期生と話すうちにアイデアが生まれた」と話します。講座修了生など10人以上の友人知人が集まって古民家を改装し、音楽や小物づくりなど各人の特技を生かしたプログラムを提供する活動を2017年にス

タートさせました。「おむすび倶楽部」と名付けた運営委員は現在15人、ボランティアや一般参加者などを含め、月におよそ300人が参加し、活動開始から6年間で、のべ23,000人もの老若男女が参加する活気あふれたコミュニティとなっています。



藤原さん(右から3番目)と会を盛り上げる仲間の皆さん

### 教員・学生も交え、広がる地域の輪

藤原さんは、「当初はここまで活動が広がると思わなかった。友人や知人の輪が広がり、杏林大学で教わった教員や学生なども参加してくれたおかげです」と喜びを語っています。参加者からは、「定年になって社会との接点が減っていたので、交流の場は張り合いになっている」「60代になってから人との出会いがあり嬉しい」などの声が聞かれます。また、総合政策学部の岡村 裕教授とゼミ生は、おむすび倶楽部からの依頼で、マインドフルネス講座を定期的実施しています。これは瞑想や写経などのアクティビティを通じた「気づく」心のエクササイズで、心穏やかな生活づくりを支援するものです。中心となる3年生の高野茜里さんは、「孫世代の我々との交流を楽しんでくれているようで

す。私たちにとっても世代を超えた交流は貴重です」と話しています。

### 地域に活気を生み出す講座

本学保健学部を2023年に卒業し、社会福祉士として三鷹市社会福祉協議会に勤める藤ノ木彩乃さんは、「担当地域でこうした活動があるのはありがたい。活気に満ちたおむすびハウスを地域住民に紹介しています」と話しています。

8年目となる本学のコーディネーター養成プログラムは、現在の履修生を合わせ40代～90代、のべ80人以上が学んできました。これからも一人ひとりが生き生きとした生活を送り、豊かな地域づくりを進められるよう、本学は支援していきます。

## 産官学連携で 市民の防災意識をアップ!

イベントで使われた「そなえるドリル」



本学は、企業や自治体、NPO法人などと連携し、地域住民の防災意識を高める支援活動に取り組んでいます。2019年には、総合政策学部の三浦秀之准教授と学生、そして三菱地所グループの防災倶楽部が連携し、親子で取り組めるドリルなどの教材を交えながら地域住民に防災の知識を養い、意識を高めるワークショップを行ったことをきっかけに、翌年両者間で産学連携協定を締結し、活動を深めています。2023年9月には三鷹市、NPO法人 Mitakaみんなの防災と3者間で連携協定を締結。今後地域住民への防災啓発活動や防災ネットワークの構築などに取り組んでいきます。

### 産官学連携で大規模イベントを運営

防災啓発活動には、学生も積極的に参加しています。2022年秋から井の頭キャンパスで始まった、全国各地の特産品などを紹介するイベント「杏林大学クラフトマーケット」では、学生が企画する防災ブースを展開しています。今年の11月11、12日のイベントでも、学生と防災倶楽部、Mitakaみんなの防災、三鷹市防災課が連携して体験会を行いました。

### 学生の工夫で楽しみながら家族で学ぶ

学生たちは、3つのブースに分かれ、三菱

地所が制作した、親子がクイズ形式で楽しみながら防災を学ぶ「そなえるドリル」を使って、「避難生活の食事。足りない食べ物は何だろう?」など、災害時に直面する困難を取りあげ、災害に備える知識を伝えたり、ポリ袋で簡単に調理できる方法を紹介したり、災害時の非常食の実物を並べて、栄養のバランスを考える体験などを行いました。

参加者からは、「災害に備えて早速、準備しようと思った」「おつまみの乾物や缶詰も立派な備蓄品になるとわかった」「ポリ袋調理のアイデアはすごい。個別の袋で調理するので食物アレルギーのある人でも安心して食べられる。残ったお湯も再利用できる」「避難生活では新聞紙やポリ袋など身近なものが役に立つとわかりました。また参加したいし、周囲にも参加を呼び掛けたい」と感想を寄せました。

ボランティア団体feelのメンバーでブースを企画した保健学部2年の近江八寛さんは「家族で楽しみながら防災を考えてもらえるように工夫しました」、総合政策学部3年の河瀬貴洋さんは「きょうの体験を家族や知り合いと共有し、防災意識を高めるきっかけになればいいです」とコメントしています。本学では、今後も産官学の連携を深めながら、災害に備えるまちづくりに取り組んでいきます。

## 災害時に命が救えるまちづくりを目指して 三鷹市民へのBLS指導



災害時や緊急時、救急車が到着するまでの間に心肺蘇生などの応急手当を行うと、救命の可能性は約2倍になることがわかっています。

応急手当の普及を図るため、保健学部救急救命学科の学生たちを中心に、地域でのBLS(Basic Life Support:心臓や呼吸が止まった時に行う一次救命処置)の指導を行っています。

### 広範囲に行う市民へのBLS指導

三鷹市民が楽しみながら防災の知識を深めるイベント「みたか防災マルシェ」に杏林大学は第1回から毎回参加しています。3回目となる2022年度、救急救命学科の学生が応急手当体験コーナーで子どもから高齢者まで約100人にBLS指導を行いました。

また、2017年からは三鷹消防署と連携して、市内の中学校で指導を行っています。今年度は3つの中学校で、のべ658人にBLS指導を行いました。指導した一人で3年生の前田紗矢香さんは、「生徒と同じ目線に立って、やさしい言葉で質問を織り交ぜながら指導しました。大切な知識なので、いざという時、この講習を思い出してほしいです」と話してい

ます。中学生からは「自分たちの行動が命を救うことを学びました」「身近な人が倒れた時は、きょう学んだことを実行して助けてあげたい」などの感想が寄せられました。

### 一人ひとりが 防災意識を高めるために

「災害に備えるまちづくり」には、市民一人ひとりの防災意識の向上が必要です。

多くの講習会で指導をしてきた3年の高橋宏明さんは、「専門用語などは平易な言葉に言い換えて説明するなど、参加者に合わせて伝え方を工夫しています。どの世代にも理解しやすい指導ができるよう心がけています」と話しています。救急救命学科の宮野 收特任教授は、「学生全員が応急手当普及員の資格を取得しています。市民の皆様へのBLS指導は、学生たちに人にやさしく、思いやりの心を持たせることにも繋がっています。こうした活動は、地域の防災力向上に必ず役立つと信じています。引き続き、三鷹市や三鷹消防署と連携して、災害時に命が救えるまちづくりに貢献していきたいと思います」と話しています。

# 杏林大の地域貢献に大きな可能性あり！

地域連携センター長 石井 博之  
(保健学部リハビリテーション学科教授)

## 多様性あるチャレンジングな舞台

本学のキャンパスがあるこの地域は、多様な世代や社会的役割の人々がモザイク的に暮らし、また工場やオフィスも多く、外国人もたくさん住んでいます。東京の中でも多様性のある地域と言えるでしょう。こうした地域は、社会のニーズやまちづくりの方向性を考える地域貢献活動を行うには非常に恵まれた環境で、ここでの知見は全国の地方都市の社会課題の解決にも役立つと思います。

## 本学の強みは医療系総合大学

杏林大の強みは医療保健系と人文社会科学系が一つになっていることです。そうい

う大学は非常に少ないので希少価値があり、大きなチャンスがあると思います。在学中に学ぶ自分の専門分野に加えて、他学部の教員の授業も受けることで、専門性に広がりを持たせることができるのです。その利点を最大化するために学部間連携が充実できれば、地域貢献の内容を高めるだけでなく、学生の質を高めることにもなります。

私は健康科学の講義を外国語学部観光交流文化学科の学生にも行っています。学生が観光関係の職業に就いて障がいのある旅行者にサービスを行うような場合、医学や保健学の知識を持っておくことが大切です。普通、これは社会に出て初めて知ることですが、杏林大では大学に居ながらそのような横

断的な学習の機会が得られます。これは他の大学にはない強みだと思います。学生が在学中に教員と共に地域での取り組みを体験することで、学んでいる専門分野が健康で活力ある地域づくりに役立つことを実感しながら学ぶことができるのです。

## 大学・地域がWIN-WINに

地域貢献活動の大きな価値の一つは、学生にとっては日々学習していることが社会にどのように役立つのかが実感でき、学習の

意義や目的がハッキリすることです。それによって学ぶことへのモチベーションが向上し、やりがいも感じます。

また、活動を通して世代間交流ができることも利点です。学生は日頃、接する機会の少ない子どもや高齢者と過ごす機会が少なく、逆に高齢者も学生と接して元気になる、子どもたちも学生がお兄さん・お姉さんのように接してくれて楽しい、ということがあります。地域貢献活動は大学と地域の双方にとってWIN-WINの関係をつくるものなのです。



# AFTER/WITHコロナの学生支援

本学の学生生活は、それぞれの学部のほか学生支援センターやキャリアサポートセンターなど、様々な事務部門が互いに連携しながらサポートしています。

## ■ 体制強化で一人ひとりに寄り添う学生支援センター

文部科学省の調査によると、2022年度の全国の国公私立大学、短期大学、大学院及び高等専門学校の中退者数は、63,098人となっています。このように多数の学生が中退した背景にはコロナ禍による様々な影響が関係していると見られています。

## 重要性増す人間関係づくり

学生支援センターでは、各学部と協力してピアサポート活動を進めています。ピアサポートとは学生の学生による支援です。具体的には、在学生による新入生の親睦会を実施したり、上級生と下級生が授業や研究で交流できる機会を設けたりして学生同士の絆を深めるきっかけにしています。また、学生相談室の相談員を増員したり、新しく職員

による学生相談会を実施したりと相談体制も整備しています。

## 相談員を増やして対応

2023年4月より学生相談室は専任2人の体制になりました。これにより昨年度に比べて開室日が増え、迅速に相談ニーズに応えられるようになりました。



近年、相談件数が増え、学生が抱える問題も深刻化する傾向にありますが、本学には相談できる人と場所が整っているため、学生の皆さんは一人で思い悩むことのないようにしてください。

## 気軽に相談を！ 「事務職員と話そう会」

話題を限定せず、カジュアルな雰囲気の中で率直に話をする中で、事務職員と学生の接点を設け、相談のハードルを下げ、信頼関係を築いていく。そんなきっかけにしたというのがこの企画の目的です。9月26日と28日に実施し、3学部の学生のべ26人が参加しました。授業や学生生活、就職に関する話題が多く、参加者の半数が「良かった」

「また参加したい」と答えるなど概ね好評でした。

## 学生生活を支えるために

高校時代がコロナ真っ只中で他人との距離感がわからない学生、リモート授業が多かったため毎日授業に出席するのが本来の形であることが理解できない学生もいるようです。それゆえに退学者が増えたものと見られ、昨年度はそれが顕著でした。

こうしたことを受け、プロジェクトチームをつくり、方策の立案や退学防止対策の研修会で得た知識を駆使して諸々のデータを分析し、退学する学生の傾向を教員と共有するなどして一人でも多くの学生への支援につなげようとしています。

## ■ 就活事情の変化に対応するキャリアサポートセンター

コロナによる景況感の悪化を受け、22年卒で1.50倍まで落ち込んだ大卒求人倍率は、24年卒では1.71倍とコロナ前の水準に戻っています。

## 就職活動はオンラインが定着

企業の採用意欲が回復する中で、コロナ前に戻りそうにないのが採用の選考方法です。特にオンラインの活用は、コロナ禍で社会経済生活に浸透したものの、コロナ後はリアルに戻ったものが少なくありませんが、就職活動においては定着しつつあります。企業説明会の多くはオンラインに変わり、企業が対面の説明会とどちらかを選択できるよう用意しても、学生の圧倒的多数はオンラインを選びます。

また、採用試験の一次面接もほとんどがオンラインで行われています。企業にとってはオンラインにすることで地方の大学など遠方も含めた参加者が増えるメリットがあり、学生にとっても移動の手間が省け、時間を

節約して多くの企業にアクセスできるようになりました。その結果、企業は多くの志望者の中から優秀な学生を選ぶことができるようになり、学生は色々な企業にチャレンジする機会が増える一方で、ライバルも増えることになりました。

キャリアサポートセンターでは、オンライン面接対策を手引きにまとめ、面接練習をオンラインでも行っている他、自宅以外でオンライン面接を受ける学生向けに、パソコンや通信環境が整ったセンターの一室を貸し出しています。ただ、数回にわたる面接の全てをオンラインで行う企業はほとんどなく、特に最終面接は対面で行われるため、従来の面接対策も欠かせず、キャリアサポートセンターでは最終面接に的を絞った講座も開いています。

## インターンシップ対応も万全に

オンライン化と並んで、コロナ後の就職活動の変化といえばインターンシップへの対応

です。コロナと期を同じくして採用活動のルールが変わり、企業は3年生の夏休み以降に自社のインターンシップに参加した学生の情報を翌春の採用活動に流用することが認められました。

企業にとっては強い志望動機を持つ学生をじっくりと時間をかけて選考できるメリットがあり、学生は希望企業に早いうちから自らをアピールすることができます。このため企業によってはインターンシップの参加者を絞り込むため、選考試験を行うところもあり、キャリアサポートセンターでは、3年生の春からインターンシップに向けたエントリーシートの作成や面接対策の講座を開いています。

採用活動のルール変更では、本来は、期間が5日間以上で就業体験を含むなど一定の基準を満たすものだけを採用に直結できるインターンシップとしていますが、ルール変更後は、3年生の夏休み以降に1日だけ開催する説明会でも、参加した学生にその後の

選考の案内を送るなど採用活動につながるケースが増えています。インターンシップも、コロナを経たオンライン化によって、企業にとっては開きやすく、学生は参加しやすくなっているという背景があり、就職活動の前倒しが進んでいます。

キャリアサポートセンターでは、低学年時から就職ガイダンスや就活対策のセミナーでこうした前倒しの動きやインターンシップ先の探し方、選び方を紹介するなど、4年間の大学生活を通して、希望にあった就職先を見つけられるよう支援しています。

(キャリアサポートセンター室長 高井 俊和)



## 頑張る学生 クローズアップ

### 医学生らしいこと何でも挑戦したい

医学部 医学科3年 **廣瀬 元美さん**



「やりたいと思ったことは積極的に取り組んでいます」。廣瀬さんはその言葉のとおり、学会での学生発表への挑戦、解剖学教室の自由参加プログラムへの参加(学生が各教室の研究活動に参加できるプログラム)、さらに5つの部活で活動するなど充実した学生生活を送っています。

#### 特技のイラストを医療分野へ

1年生の時、学生の学習レポートをまとめた冊子「私たちの教科書」の表紙を描きました。手の構造を正確に表した廣瀬さんの絵は評判となり、肉眼解剖学教室の松村讓児客員教授が会長を務めるメディカルイラストレーション学会に加入することになりました。メディカルイラストレーションとは、医学・

医療の情報を分かりやすく伝えるためのイラストのことで、医学の知識と画力の両方が必要とされます。今まで描いたイラストは、学内で展示されたり、プレゼンで活用されたりしています。今、廣瀬さんはメディカル・イラストレーション部の設立の準備を進めています。

#### 医療見学で得た地域医療の重要性

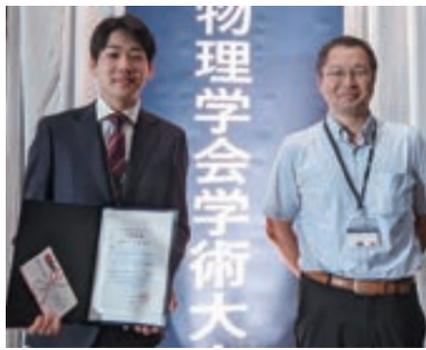
廣瀬さんが所属する部活の統合医療研究部では、夏休みにへき地の診療所を見学します。これまでは受け入れてくれる診療所が1カ所でしたが、廣瀬さんはもっと学びの場が欲しいと、現地の関係者に向けて熱意を込めてプレゼンしたところ、新たにもう1カ所受け入れてくれる診療所が手をあげてくれました。廣瀬さんたちは2カ所の診療所で実りある見学を行うことができました。

#### 新たな興味と挑戦に意欲を燃やす

自由参加プログラムでは手術の練習をする「アナトミークラブ」や「アナストクラブ」に参加して学びを深める廣瀬さん。「興味のあることに挑戦してきた結果、新たな分野にも興味をもつようになりました。将来の方向性を決められるようにこれからも挑戦していきたいです。6年生では海外臨床実習にも参加したい」と意欲を見せています。

### 研究に魅了され、切り拓いた未来

保健学部 診療放射線技術学科4年 **高橋 慶さん**



保健学部では4年次にテーマを決めて卒業研究に取り組みます。高橋さんは、放射線治療に関する人工知能(AI)の応用研究を行い、さらに、その成果を日本医学物理学学会学術大会で発表し、優秀学生発表賞を受賞しました。学会での受賞は快挙です。達成できた背景には、諦めずに研究に取り組む粘り強さとそれを支えた教員、そして丁寧に指導を行う教育環境がありました。

#### AIによる診断・治療を改善する提案

CTやMRIなどの検査装置の技術は、AIが登場したことにより日進月歩の発展を遂げています。撮影画像の精度を高めるために、ディープラーニング(深層学習)と呼ばれる技術が用いられていますが、放射線治療の治療計画用のCTで深層学習を行う場合、現在一般的に使用されているソフトでは、メモリを大量に使用するため、撮影した何枚もの

CT画像を縮小して取り込む必要があります。高橋さんは、「画像を縮小すると解像度が下がり、臓器などが鮮明に見えなくなるという懸念点を解消する策を見つけたい」との思いで、研究テーマを決めました。

まず、未経験のAI分野への理解を深めるため、独学で日本ディープラーニング協会の「G検定(ジェネラリスト検定)」に合格し、プログラミングについても勉強しました。そして、医用画像情報研究を専門とする三木健太郎准教授に指導を受けながら研究に取り組みました。「思うように研究が進まず、9月の学会で成果を発表できるのか焦りを感じながら行っていた」と話しますが、無事、省メモリ化によってCT画像を高解像度の状態で、解析を行えるソフトを見つけ、その精度を実証することができました。「質問したい時に気軽に研究室を訪問できる環境と、長時間でも丁寧に対応してくれた三木先生のおかげです。さらに、研究に励む他の同級生達の姿も励みになった」と話します。

#### 技師と研究の両立を目指して

国立がん研究センター東病院への就職が決まっている高橋さんは、本学の大学院保健学研究科で深層学習の研究も深めています。「初めての仕事と大学院をなんとか両立させ、技師として専門性を高めながら、医療界へも貢献できるように頑張ります」と力強く抱負を語っています。

### 好奇心・挑戦・経験をキャリアに繋ぐ

総合政策学部 企業経営学科2年 **大塚 久さん**



大学に入学するなり学内外を飛び回って活動している大塚さん。1年生だった2022年には、100人を超える学生が参加する東京大学のインターカレッジKINGが主催する「ビジネスコンテストA.B.C」に挑戦。初対面の人とグループになり、AIを利用した酪農動物の体調管理というビジネスの立案についてプレゼンをして準優勝を果たしました。また、この年はIT系ベンチャー企業のインターンシップも経験。クライアントとの打合せを通して、自社アプリのレイアウトや機能の改良に貢献しました。「知らないことばかりでしたが、すべてが新鮮で面白く、好奇心が刺激されました」と話します。

#### 0から1を作るサークルの立ち上げ

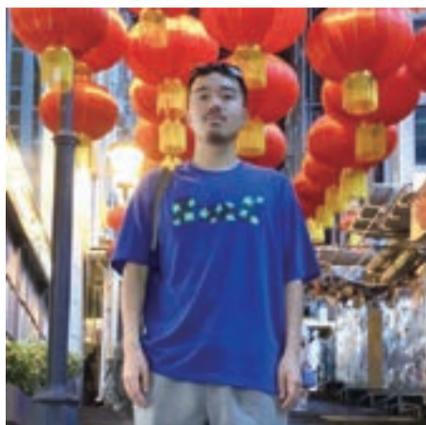
大塚さんが自分に足りないと感じたのは「0から1を作り上げる」経験でした。そこで今年の5月、ビジネスコンテストに出場するための知識やノウハウを身に付けるサークル「アスピラント」を自ら立ち上げました。現在活動しているのは、総合政策学部の学生13人ですが、他学部の学生にも関心を持ってもらいたいと話します。大塚さんは、自分が卒業してもサークルが存続できるよう各メンバーの力を伸ばすことに専念しています。「自身がサークルを引っ張るだけでなく、皆がそれぞれ役割を担い、成長できるように工夫しています。この記事を読んで興味を持った人は、ぜひ声をかけてください」とメンバーの新規加入を呼びかけています。

#### これからは見据えて

以前から美容の世界に興味がある大塚さんは、「今後はサークル活動だけでなく、美容業界の企業でもインターンシップを経験してみたい。コンサルタントや企画経営の分野も学んで、卒業後は起業して会社を運営する夢も描いています。自分の適性や本当にやりたいことは何なのか、どこまでも自らの可能性を探ってみたい」と澁淵と答えました。

### 夢は世界が相手の服飾ビジネスマン

外国語学部 中国語学科4年 **押田 大希さん**



兄が留学したことがきっかけで自らも留学を志した押田さん。外国語学部に入學した後は中国語を懸命に勉強し、3年生の8月から1年間、香港中文大学に留学しました。

#### 留学は言語を学ぶだけではない

留学前は「留学＝語学学習」と考えていた押田さんですが、留学中、単に語学を身に付けるだけでなく、重要なのは語学力を使って何をするのかだということに気づきました。

留学中の押田さんは、週4回の授業に加え、水泳部に入部して現地の学生や自分と同じように外国から来た留学生らと学生生活を満喫しました。休日も友人と様々な場所を訪れるなど活動的な1年間を過ごしました。

そして、言葉が通じることで友人も増え、行動範囲がどんどん広がり、より学びの多い留学生活を送れること実感しました。語学はコミュニケーションを広げるためのツールであると確信した押田さん。今は、次の目標に向けて勉強に励んでいます。

#### 中国の大学進学を目指して

押田さんは、留学で様々な人とコミュニケーションを取ることで、対応力が鍛えられたと感じたそうです。もっと広い視野を持って自らを成長させるため、卒業後は中国本土への留学を希望しています。このことを所属するゼミナールの宮首弘子教授に相談したところ、中国の大学に中国政府の奨学金制度を使って進学する方法があること紹介してもらいました。現在、留学に向け準備を進めています。

#### 留学を生かした将来に向けて

留学中もアパレルブランドの展示会に行くなど、アパレル関係に興味がある押田さん。将来は英語や中国語を使い、世界を相手に服飾系の仕事をしたいと考えています。そのために、中国の大学では言語や文化を学び、服飾系の仕事に必要な知識を身に付けたいと夢を膨らませています。

# 建学の精神が息づく本学キャンパス

## これって“KYORIN-ISM”(キョウリニズム)?

三鷹と井の頭の両キャンパスに足を踏み入れて誰もが思うのは、杏や桜などの木々が生き茂る緑豊かな自然環境と、そこに建てられた美しい校舎の数々です。「真・善・美」という建学の精神にも通じるこれらの貴重な資産を今一度見直し、誇りに感じ、人々に知ってもらおうという気運が今学内に広がっています。そこには命あるものへの敬意やヒューマンイズムの精神が流れているように思えます。もしかして、これこそが杏林らしさであり、杏林の魅力であり、“KYORIN-ISM”なのではないか? そんな視点で関係者を取材しました。

### 学び舎に込めた学園の思い

今年の夏、三鷹キャンパスの松田進勇記念アリーナ(2021年3月竣工)が、世界の優れた建築物に贈られる国際建築賞を受賞しました。この建物は「森のアリーナ」をテーマにつくられ、周囲の豊かな自然が感じられるように窓を配置し、建築材料には自然の素材を多用しています。主催団体の米国の建築デザイン博物館は、デザインが人間環境に与えるプラスの影響について社会の理解を深める活動を行っており、アリーナはその観点から高い評価を受けたものと見られます。

医学部講義棟A(2022年4月竣工)は、ロマネスク調のアーチを連ねた回廊や遠くのゴールを目指すように伸びる階段、そして開放感あふれるウッドテラスやプロムナードが配置され、ヒューマンイズムを大切にす本学医学部教育の理念を表しているようです。

井の頭キャンパス(2016年4月開設)は、芝生を敷き詰めた広々とした土地に、明るいレンガ色の壁と白い柱を基調とした6棟の校舎が整然と立ち並びます。中心に位置するC棟のペディメントには「真善美」がラテン語で刻まれ、学園のシンボルマークをモチーフにしたステンドグラスが青い光を放っ

ています。

これらの美しい校舎群は、松田剛明理事長の熱い思いが形になったものでした。このことについて松田理事長は、「狭い土地に校舎が密集する大都市のマンモス大学などとは違う、アメリカにあるような、ゆったりとした余裕の感じられるキャンパスにしたいと思いました。そこで学生が静かにものを考え、美しいものを美しいと感じる豊かな感受性を育ててほしいのです。医療行為はアート(癒しの技)だという言葉がありますが、医学・保健学も人文社会科学も、それを学ぶことは芸術活動と同様に人間性や人類愛を突き詰める営みだと私は考えています。そのような学びを促す環境を学生に与え、そこで本学の建学の精神を真摯に追究してもらいたいと切望しています」。

また、設計・施工を行った竹中工務店の菅原努部長は、「自然環境を大事にすること、学生が自ら学ぶ校舎にすること、コミュニケーションが行き交う空間にすることに留意しました。例えば、アリーナの前の広いスペースは、式典などの前後に人々が集い、談笑し、写真を撮る場所として機能しています。また、医学部講義棟Aには、学生が自ら調べて

仲間と自由に議論ができるようなスペースを設けました。いずれの建物にも木をふんだんに使い、多くの柱や壁に石積みをイメージし

たデザインを施しました。代々の理事長が自然を大切にきたという話を聞き、それが杏林らしさだと感じました」と話しています。



松田進勇記念アリーナ



井の頭キャンパス



医学部講義棟A

### 杏の優しさが杏林の優しさ

杏林大学の名称は、かつて呉の国の名医・董奉が患者から治療代を受け取らずに杏の木を植えさせ、その実が貧しい人々を救ったという故事に由来します。この逸話を思い起こし、杏の実を活用して何かできないだろうか? そんな思いから、渡邊卓学長の呼びかけのもと「杏の実プロジェクト」が始まりました。

まずは学内の杏を使ってジャムを作ってみようということで、今年は医学部の1年生から3年生の学生有志と生物学教室のメンバーで収穫した杏を煮詰め、砂糖を加え、

試行錯誤をしながら無添加の手作り杏ジャムを作りました。夏休み明けには、杏ジャムを使ったお菓子やシロップ漬けにした杏で作ったゼリーも用意して試食会を開きました。

このオリジナル杏ジャムは、医師になるまであと一踏ん張りの5年生全員に、日ごろの感謝とエールを込めてプレゼントされました。

取り組みを進めた医学部の栗崎健教授は、「美味しい杏ジャムができるかどうか心配でしたが、予想以上の出来に満足していま

す。将来的には、董奉が行ったように、杏林でとれた『杏の実』を人々のために役立つ活動を学生さんと一緒にできれば嬉しいです」と話しています。プロジェクトに参加した学生たちからは、「キャンパスの杏に触れることで、大学の由来や良医とはどういうものかを考える機会になった」「学年を超えて試行錯誤しながら取り組んだプロジェクトがこうして実ったことが嬉しい」などの感想が聞かれました。

一方、広報室では、杏をモチーフにした本

学独自のパワーポイントのテンプレートを作りました。表紙には杏の実と葉、最終ページには杏の実と花の画像をあしらひ、全体に杏林大学のイメージカラーである緑をベースにデザインされています。広報室では今後、様々な広報物に杏の画像を取り込んで行く予定です。「杏と言えば杏林大、杏林大と言えば杏」。このように人々が連想してくれれば、きっと本学の素敵なイメージが社会に広がって行くだろうと考えています。



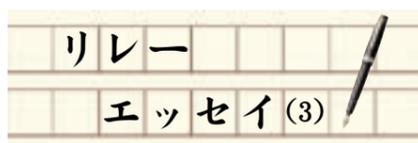
完成した杏ジャム 杏ジャムづくり



医学部5年生に杏ジャムを贈呈



PPTのデザインテンプレート



リレーエッセイでは、毎回杏林大学の先生たちに日頃の授業では取り上げない話題や知識、見聞などを自由気ままに書き綴っていただきます。

## 失われた時を求めて ナローボートで暮らす人びと

イギリスのブリテン島は平地だからテムズ川もゆったり流れている。イギリスはまた運河の国でもある。産業革命の時代、石炭や貨物を運搬するために、人びとは様々な川を幅10メートルほどの運河でつないだ。当時のボートに動力はなく、引っ張るのは岸を歩く馬。今日の運河は運搬用ではなく、大抵はレジャーボート用だ。かつての馬道は遊歩道に転用され、産業革命の恩恵を感じさせる。

運河のあちこちに、ロック(閘門)がある。船の旅人が、上流に行くためには水かさ上げ、下流に行くためには水かさ下げるシステムだ。狭いロックに船体を入れ、水の扉を閉じる。流入または排出にかかる時間は約10分。扉は最後、開けねばならないから、通過時間は正味15~20分程かかる。イギリス人は「ナローボート」と呼ばれる細長い(幅2メートル、長さ15メートルほどの)レジャーボートをよく使う。私がオックスフォードで運河沿いを歩くと、このロックで水かさののんびり調整するナローボートの旅人に遭遇するのはありふれた光景だった。閘門の開閉はマンパワー、手動だ。多くは係員もおらず、Do-It-Yourselfのスタイルである。それでも船上の旅人はマナーが良いのか、問題があるという話も聞かなかった。

ナローボートは究極の自立系ミニマリズムで、自宅を売ったり貸したりして船上生活を始



める若者や年金生活者も多い。YouTubeをみると、ナローボート生活のスヌメリな映像が確かにあちこちに上がっている。ずっと船上生活では不便だと思うが、誰もが「最高だよ、この自由と自然が何よりも良い」と口を揃える。生活のために手掛けている内職の作業をこなし、郵便物を上陸先で整理し、友人とも会う。太陽光が動力源の洗濯機は乾燥機付、コーヒーマーカーも使え、石炭ストーブもパソコンもテレビもある。天候不良や故障で想定外の日もあるが、ライフスタイルを優先する彼らのこと、陸上生活に移行しようとは考えない。知り合いのさる大学教授の息子さんも、最近奥様とナローボート生活に移行したと聞いた。

ナローボートでイギリスを巡る逞しい旅人たちは、ドイツ児童文学の『モモ』の物語のようだ。彼らも今のスローなライフスタイルに移る前は、忙しく暮らし「時間どろぼう」と熾烈な闘いを繰り広げていただろう。美しい自然と時速6キロ余りの穏やかな流れの中で、失われた時をじっくりと回復しようとする、そんな試みが、ナローボートとともにあるように思う。



たかぎ まさこ  
外国語学部 英語学科 教授 高木 眞佐子

慶應義塾大学文学部フランス文学専攻卒業、同大学大学院文学研究科後期博士課程単位取得退学(専門は中世英文学)。2002年杏林大学外国語学部着任、2018年9月~2019年9月 英国オックスフォードで在外研究

## 健康ひとくちメモ ③

### ヒートショック対策 ~サウナを楽しむために~



老若男女を問わずサウナを好んで利用する人が増えたのではないのでしょうか。サウナは血行促進やリフレッシュ効果などの良い面があります。しかし、高齢の方や若い方でもサウナによるヒートショックと考えられる事故で救急搬送されるケースが目立っています。このため、サウナを安全に楽しむためにヒートショックについて知ることは非常に重要です。

#### ヒートショックとは

ヒートショックは、急激な温度変化が影響し、血圧や心拍数が大きく変化し、その時に体に悪影響が生じることです。例えば、サウナルームで体を温めた後、水風呂で急激に冷やす行為は危険を伴います。水風呂の寒冷刺激によって、交感神経が反応し、血圧の急上昇や、頻脈になることがあります。そして、寒冷刺激に長くさらされると脈が遅くなる徐脈になることもあります。頻脈・徐脈などから失神し、転倒により頭部打撲や出血、骨折する場合もあり、大変危険です。これを防ぐためには、以下のポイントを押さえましょう。

#### サウナのヒートショック対策

- 飲酒後は控えましょう
- 体調が少しでも優れないと感じたら、利用を控えましょう
- 休憩時間を作りましょう
- 入る前や途中で水分を十分に補給しましょう
- 高血圧や心臓・脳・血管・呼吸器などに疾患がある人はかかりつけ医に相談しましょう

#### 最後に

サウナは身体が温まり気持ちがいいですし、正しい方法で入れれば健康に良いという報告もあります。しかしながら入り方を間違えると事故に遭うことがあります。ぜひ、以上の点に注意して、安全にサウナを楽しんでください。



はせがわ ひろし  
医学部 総合医療学教室 教授 長谷川 浩

千葉大学医学部卒業。慶應義塾大学医学部老年科学教室、北里研究所病院、米国Wake Forest University section of Cardiology Research Fellowを経て、2003年杏林大学医学部着任。専門は高齢者救急、老年医学、認知症、老年循環器学

コロナ禍を経ていよいよ留学、という学生さんも多いのでは？  
そうした皆さんに向けて、  
外国語学部のジャッキー・トルケン先生から  
貴重なアドバイスが寄せられました。  
これを読んで爽やかな留学体験を。Good Luck!



Faculty of Foreign Studies Lecturer  
Jackie Talken

### Before going to study abroad...

So, you've decided to study abroad, good for you! I'm sure you will have many memorable experiences and learn a lot of unexpected things during your time abroad. First, however, how do you prepare for such an endeavor? Here are a few ideas to get your started. Please feel free to contact me if you have questions or want further suggestions.

First of all, it's of course a good idea to check out the school's homepage to see if the educational program is aligned with your study abroad goals. Then, have a look for ways outside of class to connect with others, such as clubs or teams, or campus events.

To get a feel for the language used in a certain country, learn some basic expressions (e.g., ①), or get used to the accent and rhythm of a specific region by looking for a local radio station (e.g., ②). Some universities even have their own student-run radio stations (e.g., ③). Learning a bit of local slang may help you fit in and understand others more easily, too (e.g., ④).

If you're heading to an English- or Chinese-speaking country, be sure to visit the Salons on Inokashira Campus to practice speaking and listening. For other languages, there are useful apps such as Hello Talk (e.g., ⑤).

You'll naturally want to explore the country and area you're living in while you're there, too. So, look for local tourist information websites (e.g., ⑥), explore using Google Maps Street View, or check out online guidebooks (e.g., ⑦).

Wherever you're headed and for however long, I hope you have an amazing time, make lots of friends, and learn many things, both about the people and places you visit and about yourself and your own culture. Bon voyage!



## 新たな病院を開設予定 (2024年4月)

杏林学園は、2024年4月1日に2つ目の医学部付属病院を開設します。この病院は東京都杉並区和田2丁目25-1に立地し、現在は宗教法人立正佼成会によって運営されていますが、今年5月に両者間で事業譲渡契約が結ばれ、現在、病院開設に伴う行政の手続きが進められています。新病院の名称は「杏林大学医学部付属杉並病院」(予定病床数: 340)となり、医学・保健学の臨床研究を向上させるだけでなく、専門性の高い医療サービスが提供される大学病院として地域社会から期待されています。



### 杏林大学新聞 読者アンケートにご協力ください

皆様からお寄せいただいた感想など今後の紙面づくりの参考とさせていただきます。



アンケートの  
回答は  
こちらから  
お願いします

#### 編集を終えて

・今号では本学が担う地域連携や地域の課題解決に向けた取り組みを特集し、地域の活性化や地域交流の促進に寄与している姿とともに学生の貴重な学びや研究課題につながっている実例を紹介しました。地(知)の拠点として本学が果たす社会貢献の重要性を再認識するとともに、これらの活動に携わる各学部や学生諸君の熱量を実感していただけるのではないのでしょうか。(編集長)

・大学の使命の一つである「社会貢献」を「社会還元」に言い換えようという意見があります。確かに「貢献」に比べて「還元」には目線の低さや社会に寄り添う謙虚な姿勢が感じられます。大学が国や地域から支えられている現実を教職員も学生も再認識し、自らの教育・研究の成果をそこに暮らす人々のために役立てる。これは大学人の責務であり、目的であり、喜びであり、その還元力がますます大学に求められているように思います。(広報室長)

杏林大学新聞 編集長 志村良浩 / 広報室  
TEL.0422-44-0611 E-mail koho@ks.kyorin-u.ac.jp URL https://www.kyorin-u.ac.jp/